『日本語学論集』第一八号　二〇一二年三月

漢字音の拗音と外来語の拗音

肥爪　周二

一　問題の所在

拗音（開拗音・合拗音）は、もともと固有の日本語には存在しなかったものが、中国語からの借用によって日本語に移入されたものであると考えられている。しかしながら、表記・文法・語彙など、言語を構成する様々な要素の中でも、音声・音韻は最も閉鎖的であり、他言語の影響を受けにくいものであるともされる。開拗音・合拗音も、すんなりと日本語に定着することは出来なかったはずであり、実際、受け入れる過程での紆余曲折が、過去の文献資料における表記や、現代の拗音の分布などに痕跡をとどめている。その一方で、主に近代以降に狭義外来語を受容する際の「拗音」の処理については、日本語研究において取り立てて問題とされることはないように思われるが、漢字音の拗音の受容と比較するとき、明らかに異なる方式によって「拗音」を組み込んでいるという事実に気がつく。

そこで本稿では、借用語音韻論の立場から、漢字音と外来語の「拗音」の受容方針の差異と、それを生じさせた理由について考察することにする。

なお、右の説明で、一部カギ括弧付きで「拗音」と表現したのは、本稿において実際に扱うのが、中国語から漢字音を借用した際、原音の CiV・CuV というタイプの音連続をどのように受容するか、欧米の言語からの借用（狭義外来語）においては、CjV・CwV というタイプの音連続をどのように受容するかという問題であり、結果的に日本語としては拗音にならないことがあるためである。以下、煩を避けるために「拗音」からカギ括弧を外すが、一般的な使い方とは重ならない部分があることをお断りしておく。

二　拗音の受容と音節組織の組み換え

先に述べたように、拗音は漢字音の一要素として日本語に移入されたものであり、原音の CiV・CuV というタイプの音連続（の一部）が、それぞれ開拗音・合拗音という、当時の固有語には存在しなかった形で受容されることになった。その結果、主に日本語側の事情により、以下のような分布の偏りが生じている。

開拗音　すべての行に見られる
（若干の分布の偏りはある）。
ア段・ウ段・オ段

合拗音　原則としてカ行・ガ行にのみ見られる。
ア段・イ段・エ段
（漢音資料に見えるサ行・タ行などの合拗音は、一部の知識人層の中国語学習の成果であって、広く普及するようなものではなかった）。

開拗音は、院政期以降にはオノマトペに、室町時代以降には和語にも見えるようになり、完全に日本語の音韻体系に同化して現在に至っている。

白キ狗ノ行ド哭テ立テリ　〔今昔二八・二九〕
ほらがひの丁どおちていとわれ　〔梁塵秘抄四六八〕
ニツクイ人ヂヤゾ　〔漢書列伝竺桃抄四8〕
おである∨おぢゃる、おいりある∨おりゃる　等

一方の合拗音は、鎌倉時代にはイ段・エ段のクヰ・クヱ等は直音化して消滅したが、ア段のクワ・グワは比較的安定的に存続し、オノマトペやその派生語にも用いられた。

Quararito、Quatto、Guarameqi　〔日葡辞書〕

和語には原則として波及しなかったが、「蹴〈化ル〉〔観智院本類聚名義抄・法上四四オ〕など」が例外となる。残ったア段のクワ・グワも江戸時代以降には、ほとんどの方言において消滅することになった。

以上のような、開拗音が定着し、合拗音が結果的に弾き出された事実に対しては、林（一九八三）・高山（二〇〇五）・小倉（二〇一一）などで説明が試みられている。特に、開拗音が日本語に受容された下地としては、林・高山は、固有語における口蓋化を受けたイ段子音の存在（つまり音声レベルの下地）を挙げ、小倉は、上代語の音韻体系に想定される《あきま》（つまり音韻レベルの下地）を挙げている。これらの論評は省略するが、本稿の立場としては、開拗音の定着はすんなりとは行われず、現代語のような状態になる（直音と同じ重さになる）のには、かなりの時間を要したという見通しを持っている。その上で、以下のような「音節組織の組み換え」を日本語史上に想定する（軽音節のみを挙げ、清濁の区別は省略する）。

（旧組織） 平安中期		↓	（新組織） 室町前期		
アイウ衣オ			アイウエオ	ヤ	ユ　ヨ　ワ
カキクケコ			カキクケコ	キャ	キュ　キョ　クヮ
サシスセソ			サシスセソ	シャ	シュ　ショ
タチツテト			タチツテト	チャ	チュ　チョ
ナニヌネノ			ナニヌネノ	ニャ	ニュ　ニョ
ハヒフヘホ			ハヒフヘホ	ヒャ(ヒュ)	ヒョ
マミムメモ			マミムメモ	ミャ(ミュ)	ミョ
ヤ○ユ江ヨ			ラリルレロ	リャ	リュ　リョ
ラリルレロ					
ワヰ○エヲ					

①ア行・ヤ行・ワ行の統合、②開拗音の日本語の音韻体系への同化、③合拗音（ア段以外）の消失、などが、この組み換えの背後で進行したことになる。

ちなみに、ヤ行の江、ワ行のヰ・ヱ・ヲに相当する外来語音は、yellow イエロー〜°イェロー、wink ウインク〜ウィンク、wet ウエット〜ウェット、wash ウオッシュ〜ウォッシュのように、表記のゆれが観察されるものの、特に発音に差があるわけではない。その発音は1モーラに納まりにくく、短歌や俳句に詠み込む場合は2単位に扱うことが多いが、和語の2モーラとは明らかに異なる発音を志向する（アクセント規則上も、1モーラ相当の振る舞いをすることが多い）という中途半端な状態にとどまっている。古典和歌において1単位扱いされていたこれらの音が、音節組織の組み換えの結果、復帰すべき《あきま》が消滅したことにより、現代日本語には馴染みにくい音になってしまったと説明できる（聞き取ったり発音したりすることが困難という意味ではない）。同じ外来語音でも、ティ・トゥなどが無理なく1モーラで振る舞えるのとは好対照である。

後述する「逆 キアク、捨 シア、敵 チアク〔金光明最勝王経平安初期点〕」「羌 キイヤ、跡 シイヤク〔法華義疏長保四年点〕」のような表記例も勘案し、音節組織の組み換え前、開拗音は「キヤ」「キヨ」等の表記通りに2単位的に移入され、現代語のウィ・ウェ等のように、完全には日本語に同化していない状態を経て、室町時代頃にようやく1単位化（1モーラ化）したと考えたい。

三　二重母音として受容されるCiV・CuV

ここまで開拗音・合拗音を自明の概念として述べてきたが、中国原音で CiV・CuV に相当する音連続の一部は、二重母音として受容され、現代の漢字音において2モーラで定着している。それらも拗音と密接に関わるものであるので、あらためて確認しておく。

まず止摂合口字であるが、カ行・ガ行とそれ以外の行とで、

異なる受容のされ方をしている。

カ行・ガ行　ワ行表記の合拗音
クヰ・グヰ → キ・ギ（直音化）
それ以外　ア行表記の二重母音
スイ・ツイ・ルイ・ユイなど
＊ワ行はヰとなり、開合の対立のない唇音声母においてはヒ・ビ・ミとなる。

スイ・ツイ・ルイ・ユイなどが合拗音と呼ばれることはないが、原音の介要素音-ŭ-が消去されずに日本漢字音に反映しているという意味で、注意しておく必要がある。結果的に日本漢字音（呉音・漢音）はクイ・グイという音形を欠くことになった（唐音には「石灰シックイ」などの例がある）。

もう一つが日本漢字音でウ段拗音になる音である（通摂東韻三等・鍾韻・遇摂虞韻・流摂尤韻など）。短いウ段拗音が原則としてシュ・ジュしか存在せず、他の行のウ段拗音がキュー・チュー・ニューのように長く伸ばした形で現れるのは、以下のような受容のされ方があったからである（肥爪二〇〇一）。

サ行・ザ行　ヤ行表記の開拗音
シュ・ジュ
ア行表記の二重母音
シウ・ジウ
それ以外　ア行表記の二重母音
キウ・チウ・ニウ・リウなど
（p入声のキフ・ニフ等もこれに合流する）

合拗音の場合には、完全な相補分布をなしていたが、ウ段拗音の場合は、サ行・ザ行がヤ行表記・ア行表記の両様に現れる。いずれにしても、Cui・Ciu という対をなす水平二重母音において、カ行・ガ行の合拗音とサ行・ザ行の開拗音が対称的な振る舞いをしているように見える点に注意が必要である。次節以降で述べるように、サ行・ザ行開拗音とカ行・ガ行合拗音とは、さまざまな点で平行的な振る舞いをするからである。

四　拗音（開拗音・合拗音）の表記史の非対称性

先学による訓点資料・平安朝平仮名資料などの調査の蓄積により、ヤ行拗音・ワ行拗音と呼ばれることもある開拗音・合拗音の表記の歴史は、必ずしも平行的に展開したわけではなかったことが明らかにされている。以下、代表的な資料における拗音表記の実態を例示する。

聖語蔵本『央掘魔羅経』平安極初期点　八一〇年頃

①開拗音

〔ア行表記〕嬰 伊゜阿宇、桀 千悪、壌 尓阿宇、溺 三悪、
歴 リ阿口、聾 リ宇
〔類音表記〕詳 生、傷 生、唱 生、牀 生、索 昔、臭 首、
渚 初、瓶 平、蹭 白、鳴 命、猛 命
②合拗音
〔拗音仮名表記〕活 果矢反
〔類音表記〕醯 化
聖語蔵本『阿毘達磨雑集論』平安極初期点 八一〇年頃
①開拗音
〔ア行表記〕釈 志阿久、択 （チ）阿九、弱 美悪
②合拗音
〔ア行表記〕奥 ぬ阿尓
〔類音表記〕毀 鬼
西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点 八三〇年頃
①開拗音
〔ア行表記〕逆 キアク、捨 シア、遮 シア、敵 チアク、
壌 ニアウ、律 リウト
〔直音表記〕遮 サ、靂 ラク反、略 ラク
〔拗音仮名表記〕浄 赤ウ反
〔類音表記〕承 乗、諍 上反、霹 百
②合拗音
〔拗音仮名表記〕鐲 化イ反
〔類音表記〕戈 火反、毀 貴、輝 鬼反、関 犬反、
鐲 券反、幻 犬反
石山寺本『法華義疏』長保四年（一〇〇二）点
①開拗音
〔ヤ行表記〕羌 キイヤ、矜（衿）キイヨム、跡 シイヤク
〔拗音仮名表記〕斥 尺ク
〔類音表記〕匠 上反、僻 白反、諒 量反
②合拗音
〔ワ行表記〕苽 クワ（ママ）、乖 クワ反、華 クハ、冠 クワ
〔類音表記〕逵 貴
関戸本・東大寺切『三宝絵』保安元年（一一二〇）識語
①開拗音
〔直音表記〕〔サ行〕たいさく（帝釈）さか女らい（釈迦
如来）せさう（殺生）ちくさう（畜生）くさく（孔
雀）さけむ（邪見）大そうさう（大僧正）さうか
い（浄戒）すさう（衆生）しんす（神呪）ほたい
す（菩提樹）願す（願主）女いす（如意珠）すし
（誦し）さいそう仙人（最勝仙人）大そう経てん
（大乗経典）……〔サ行以外〕無らうこふ（無
量劫）せんたう（禅定）
〔類音表記〕さか女らい（釈迦如来）女いす（如意珠）
尺そむ（釈尊）す上（衆生）ふ経ほさち（不軽菩
薩）
〔漢字表記〕大そう経てん（大乗経典）は若（般若）

ふ明（普明）百さい（百済）三まい定（三昧定）
ひ女（貧女）せ行（施行）

②合拗音

〔漢字表記〕願す（願主）花こむ（花厳）すみとう光如来（須弥燈光如来）へ化（変化）

小林（一九六三）・築島（一九六九）など、先学の研究成果を踏まえると、開拗音・合拗音の表記の歴史は以下のように概括される。

開拗音　平安初期から仮名表記あり。
ア行表記・ヤ行表記　→2単位表記
直音表記　→1単位表記
（サ行・ザ行に集中）
拗音仮名表記　→1単位表記
（原則サ行・ザ行のみ）
類音表記

合拗音　仮名表記は遅れて発達。
ワ行表記（十一世紀以降）→2単位表記
直音表記（極めて稀）　→1単位表記
拗音仮名表記　→1単位表記
類音表記

開拗音は、平安初期から仮名二字による表記がある程度普及していたのに対し、合拗音は、拗音仮名表記・類音表記が先行し、仮名で表記すること自体はなかなか行われず、クワ・クヰ等の仮名二字で表記する方式は、十一世紀以降にようやく目につくようになる。

いわゆる直音表記がサ行・ザ行開拗音に集中して見られるのは、古代日本語のサ行・ザ行子音の音声的特徴（調音位置の許容幅が広かった）に由来するものであろう。これも1単位表記ということになる。拗音仮名表記は、拗音を一字で表記するという意味で1単位表記であり、サ行・ザ行の開拗音と、（カ行・ガ行の）合拗音に事実上限定される。ここにもサ行・ザ行開拗音とカ行・ガ行合拗音との意外な相似が指摘できる。

五　拗音（開拗音・合拗音）の受容の初期段階

亀井（一九七二）の「（合拗音は結局は体系から弾き出されてしまったが、開拗音は）これが取り入れられるにも、これまたそこにその下地が有って、即ち日本側がこれを選択して受け入れたと解釈できる」という見解の影響か、合拗音は最初から日本語の音韻体系から弾き出される運命にあった、というイメージで語られることがあるが、過去の日本語において、カ行・ガ行合拗音も意外に安定した存在であったことは、軽視すべきではないであろう。亀井（一九四七）では、合拗音にも「相応

の下地があったものとしなければならない」と述べられている。

・王朝女流文学作品でも、ごく普通に使用。

・ア段合拗音は、遅くまで残る。

オノマトペとして定着度が高かった。

Quararito、Quatto、Guarameqi〔日葡辞書〕

第三節で取り上げた止摂合口字の場合、カ行・ガ行もクイ・グイという二重母音形で受容する選択肢が有ったにもかかわらず、それを避けて、わざわざ合拗音クヰ・グヰで受け入れたのは、それが十分に受け入れやすい形であったからであろう。

カ行・ガ行合拗音は、むしろ開拗音一般よりも、すんなり日本語に受容されていた可能性さえあると考えている。なぜなら、すでに触れてきたように、開拗音の中でも特異な振る舞いをするサ行・ザ行開拗音と、カ行・ガ行合拗音とでは、いくつかの共通の特徴が見られるからである。

【仮説】

開拗音：分解圧縮法により移入・定着。→2単位的

合拗音：《あきま》に受け入れる形で移入。→1単位的

サ行・ザ行開拗音は、2単位的にも1単位的にも受容。

分解圧縮法とは、2単位に分解した上で、必要に応じて圧縮気味に発音する受容法のことである。star→スター、wit→ウイットの傍線部は2モーラであるが、より外国語風に発音したければ、それを圧縮して短めに発音するのも容易である。

2単位的受容とは、現代の外来語で言えば、ウィ・ウェ等に類似した受容の仕方、1単位的受容とは、ティ・トゥ等に類似した受容の仕方とイメージしていただきたい。合拗音が《あきま》に受け入れられたという見解は、小倉（二〇一一）と肥爪（二〇一九）に共通して見られるものであるが、いつの時代のどこの部分に《あきま》を想定するかについては考え方が相違している。いずれの説明もやや難点があるので、合拗音の振る舞いが1単位的であるという見通しのもと、さらに考察を深めたいところである。

サ行・ザ行開拗音とカ行・ガ行合拗音の更なる相似として、万葉集・仏足石歌に見られる漢語の拗音の分布を挙げたい。万葉集の歌にいくつの漢語の例があるのか、確定的なことは言いにくいが、以下、現行注釈書で漢語と認定されることが多いもののみを取り上げることにする。それらのうち、拗音が含まれているものを挙げると、カ行合拗音とサ行合拗音に限定されることに気づく。阿毘達磨雑集論平安極初期点の「奚ぬ阿尓」というナ行合拗音の例を考慮し、後世の日本漢字音で合拗音とならない CuV 相当の漢字を含めても結果は同様である。

【カ行合拗音】

相思はぬ人を思ふは大寺の餓**鬼**〈餓鬼〉の後に額づくがごと〔万四・六〇八〕

寺寺の女餓**鬼**〈餓鬼〉申さく大神の男餓**鬼**〈餓鬼〉賜りて其の子孕まむ〔万一六・三八四〇〕

檀越や然もな言ひそ里長が**課**役〈課役〉徴らば汝も泣かむ〔万一六・三八四七〕

過所〈過所〉無しに関飛び越ゆる霍公鳥まねく吾子にも止まず通はむ〔万一五・三七五四〕

【サ行開拗音】

過**所**〈過所〉無しに関飛び越ゆる霍公鳥まねく吾子にも止まず通はむ〔万一五・三七五四〕

釈迦の御足跡石に写し置き敬ひて後の仏に譲りまつらむ捧げまうさむ〈**舎**加乃美阿止伊波尓宇都志於伎宇夜麻比弖乃知乃保止氣尓由豆利麻都良牟佐々義麻宇佐牟〉〔仏足石歌九〕

右のうち「餓鬼」については、『和名類聚抄』（元和版）に「和名加岐」とあり、早くから直音化していた可能性がある。小倉（二〇一一）は、推古朝遺文においては、奈良時代（古事記・日本書紀・万葉集）の万葉仮名と異なり、キ乙類に合口性のある仮名を用いていることを指摘しており、「餓鬼」は、推古期にキ乙類、つまり非合拗音で受容した古い外来語であったのかもしれない。仏足石歌の「釈迦〈**舎**加〉」は、同じ歌で「捧げまうさむ〈**佐**々義麻宇**佐**牟〉」と、和語のサには別の仮名を当てているので、拗音のシャを表記したものと見て良いであろう。

その他、通常は拗音に読まれていないが、他の読み方（漢音など）をすれば拗音が含まれることになりうるものとして、以下のようなものがある。

【マ行開拗音？】

心をし無何有の郷に置きてあらば**藐**孤射〈藐孤射〉（まこや・はこや）の山を見まく近けむ〔万一六・三八五一〕

藐（呉音メウ／ミヤク・漢音ベウ／バク）

【ガ行合拗音？】

わが妻も絵〈**画**〉に描きとらむ暇もが旅行く吾は見つつしのはむ〔万二〇・四三二七〕

画（呉音ヱ／グワ・漢音クワ／クワク）

【カ行開拗音？】

香、塔、厠、屎、鮒、奴を詠む歌

香〈香〉塗れる塔にな寄りそ川隅の屎鮒喫める痛き女奴〔万一六・三八二八〕

香（呉音カウ・漢音キヤウ）

【ラ行開拗音？】

池神の**力**士〈力士〉舞かも白鷺の桙啄ひ持ちて飛びわたる

らむ〔万一六・三八三一〕
力（呉音リキ・漢音リョク）

全体的に例数が少なく、サ行開拗音・カ行合拗音以外の拗音が埋もれている可能性を否定しきることは難しいが、現状で広く認められている範囲では、サ行開拗音とカ行合拗音に限定されるということになる。これらの漢語が、大和言葉で紡がれる歌の表現にも溶け込みやすい語彙であり、音の面でも、サ行開拗音・カ行合拗音は歌の韻律に1単位でなじみやすいものであったと考えたい。

サ行・ザ行開拗音は、他の行の開拗音とは異なり、二様の受け入れ方が併存したと推定される。

①分解を経ずに、1単位的に受容
②分解を経た受容（他の開拗音と同様）

この①の1単位的受容という面が、たまたま合拗音の受容方式と重なり合っているため、ここまで述べてきたようなサ行・ザ行開拗音とカ行・ガ行合拗音の不思議な相似が観察されるのであろう。この相似はあくまで結果的に生じたに過ぎないものである。サ行・ザ行開拗音は古代日本語のサ行・ザ行子音の音価の特性（調音位置の許容幅が広かった）が原因となって1単位的にも受容できたのであり、カ行・ガ行合拗音は、おそらく存在した音素結合の《あきま》に入り込んだため、（現代の外来語のティ・トゥなどと同じ様に）1単位で定着できたと推定する。そして、先述の音節組織の組み換えに連動して、合拗音はア段のクワ・グワを除いて、日本語の音韻体系から弾き出されてしまったと説明されよう。

六　外来語の拗音

さて、狭義の外来語を受容する際、CjV・CwV というタイプの音連続はどのように日本語に取り込まれたのであろうか。

CjV タイプの音連続は、基本的に開拗音で受け入れていると見て良いであろう。早い時期の例としては、ポルトガル語起源の「jorro ジョウロ（如雨露）」があり、その後はキャンプ・リュック・チョコレートなど枚挙にいとまがない。

CwV タイプの音連続は、合拗音とはならず、かなり規則的に2モーラに分割して受け入れている。

クワイエット（quiet）、クイズ（quiz）、クオーター（quarter）、スワン（swan）、スイム（swim）、ツイッター（Twitter）など。

つまり CjV は1単位、CwV は2単位で受け入れているということである。

この受容の方式を、漢字音における CiV・CuV タイプの音

連続の初期の受容の仕方と比べてみると、根本的な違いがあることに気がつく。CuV タイプの音連続は、カ行・ガ行で受け入れる場合以外には、介音-ŭ-の要素を反映しない（直音化する）のが原則であるので、やや単純化して、それも1単位での受容と解するならば、漢字音と狭義外来語とでは、拗音の受容の仕方が歴史的に逆転していることになる。

受容の方式（漢字音→狭義外来語）
開拗音（CiV・CjV）：2単位→1単位
合拗音（CuV・CwV）：1単位→2単位

繰り返しになるが、2単位的とは、現代の外来語でウィ・ウェなどの受け入れ方のイメージ、1単位的とはティ・トゥなどの受け入れ方のイメージである。

右の整理は、サ行・ザ行開拗音の問題や、止摂合口字の問題を、例外の側として棚上げしているので、単純化が過ぎるかもしれないが、この歴史的変化の背後に、第二節に述べた音節組織の組み換えという、日本語音節構造史上の大きな転換があったことは、あらためて確認しておきたい。

［参考文献］

小倉肇（二〇一一）『日本語音韻史論考』（和泉書院）
春日政治（一九三九）「聖語蔵本唐写阿毘達磨雑集論の古点について」（『安藤教授還暦祝賀記念論文集』三省堂）
春日政治（一九四二）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』（岩波書店）
亀井孝（一九四七）「八咫烏はなんと鳴いたか」（『ぬはり』二一ノ一～四）
亀井孝（一九七二）「分科討論会 漢字音と国語音―中世を中心に―」における発言の記録（『国語学』九〇）
小林芳規（一九六三）「訓点における拗音表記の沿革」（『王朝文学』九）
高山知明（二〇〇五）「拗音に見る非対称性」（『音声研究』九ノ一）
築島裕（一九六九）『平安時代語新論』（東京大学出版会）
築島裕（一九八五）「正倉院聖語蔵大智度論古点及び央掘魔羅経古点について」（『正倉院年報』七）
中田祝夫（一九五四）『改訂版 古点本の国語学的研究 訳文篇』（勉誠社）
林史典（一九八三）「中古漢語の介音と日本呉音」（『文芸言語研究 言語篇』八）
肥爪周二（二〇〇一）「ウ列開拗音の沿革」（『訓点語と訓点資料』一〇七）
肥爪周二（二〇一九）『日本語音節構造史の研究』（汲古書院）

［使用テキスト等］

○万葉集／原文：佐竹昭広他『補訂版 万葉集 本文篇』（塙書房一九九

八）、訓み下し文：諸種の注釈を参考に、私に作成。○仏足石歌／『古代歌謡集』（岩波書店・日本古典文学大系）。○央掘魔羅経平安極初期点／聖語蔵本：築島裕（一九八五）。○阿毘達磨雑集論平安極初期点／聖語蔵本：春日政治（一九三九）。○金光明最勝王経平安初期点／西大寺本：春日政治（一九四二）。○法華義疏長保四年点／石山寺本：中田祝夫（一九五四）。○三宝絵／関戸本・東大寺切：小泉弘・高橋伸幸『諸本対照三宝絵集成』（笠間書院）、『三宝絵 名古屋市博物館蔵』（名古屋市博物館）。○今昔物語集／『今昔物語集』（岩波書店・日本古典文学大系）。○梁塵秘抄／小林芳規・神作光一・王朝文学研究会編『梁塵秘抄総索引』（武蔵野書院）。○漢書列伝竺桃抄／京都大学附属図書館蔵本：尾道短期大学国文研究室編『漢書列伝竺桃抄』。○和名類聚抄／元和古活字版（二十巻本）：京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』（臨川書店）。○類聚名義抄／観智院本：『類聚名義抄 観智院本』（八木書店・新天理図書館善本叢書）。○日葡辞書／土井忠生他編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店）。

［付記］

本稿は、二〇二一年六月十九日（土）に開催された、愛知県立大学国文学会（オンライン）での講演「借用語音韻論からみた拗音の変遷」の内容を再構成したものである。

（ひづめ　しゅうじ　大学院人文社会系研究科　教授）